立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２００５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　コミュニティ福祉学研究科　人間関係学専攻		
指導教員	所属･職名	氏 名	
	コミュニティ福祉学部・教授	福山　清蔵　印	
自然･人文の別	自然　・　人文	個人・共同の別	個人　・　共同　　名
研究課題名	発達的な遅れがあるとされた子どもの母親への有効なソーシャルサポートについての研究		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	コミュニティ福祉学研究科・人間関係学専攻 前期課程３年	新村　陵子　印	
研 究 組 織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2005　　年度		
研究経費	200　　千円		

研究の概要（200～300 字で記入，図･グラフ等は使用しないこと．）

子ども家庭相談機関の一つである家庭児童相談室は育児支援だけではなく，発達支援としての，また地域ネットワークの一翼を担う存在として重要である．本研究では，家庭児童相談室が開催する親子グループに通ってきている母親への調査を通して，発達的な援助を必要とする子どもを持つ母親が必要としている支援はなにかを明確にすることを目的とした．母親からのインタビューデータを分析し，グループが育児支援として，また発達支援としてのニーズに対応しているか．そして，グループが地域のネットワークとしての役割を果たすためにはなにが必要かについて検討した．

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入.）

〔　子ども家庭支援　〕〔　育児支援ネットワーク　〕〔　発達支援　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと．）

本研究では，子ども家庭相談機関の一つである，家庭児童相談室を取り上げた．家庭児童相談室は，育児支援だけではなく，発達支援としての，また，地域ネットワークの一翼を担う機関として貴重な存在である．しかし，家庭児童相談室のサービス内容や目的についての研究は少なく，検討の余地がある．そこで本研究では，家庭児童相談室の活動の中心である，「親子グループ」が育児支援として，また発達支援として地域ネットワークにおいて役割を果たすためには何が求められているかを，親子グループに参加した母親からの調査によって明らかにすることを目的とした．

予備調査では，家庭児童相談室への来談動機を明確にするために「グループ参加の動機」を7項目にそれぞれ5件法で選択してもらった．また，本調査に向けて，母親の求めている援助のニーズを把握するためにアンケート調査と面接調査を実施した．対象者は，2003 年4月～2004 年3月に，A市家庭児童相談室の親子グループに参加した母親20 名．対象者にはアンケートに回答してもらい（回答 14 名），その回答者の中から同意の得られた5名に面接調査を行った．グループ参加動機については，「情報を得るため」「知識を得るため」「相談相手を得るため」「子どもの友達を得るため」「自分の友達を得るため」「家の外と接触を持つため」「薦められて」の7項目を5件法で選択してもらった．結果は，「子どもの友達を得るため」「家の外と接触を持つため」の得点は高く，続いて「薦められて」「相談相手を得るため」が多く，「自分の友達を得るため」「情報を得るため」「知識を得るためと続いた．また，「相談相手を得るため」の得点は非常に高いとはいえないものの，すべての母親が5件法のうち2以上をつけていたことによりこの動機はどの母親にも共通することがわかった．インタビュー調査においては，家庭児童相談室や親子グループに参加して感じたことを自由に語ってもらい，内容を抽出した．家庭児童相談室への来談経緯は，乳幼児健診後のフォローアップとしてという理由が5人中4人であり，残りの一人は医療機関からの紹介だった．インタビューで見えてきたことは，子育ては孤立しがちであること．特に発達的な遅れがあると親が認めている場合には，外に連れて出ることで言葉の遅れや発達の遅れを指摘されることへの不安や，目に見える子どもの発達の遅れなどに対して周囲から心無い言葉を掛けられることを避けるために外出をためらっていることが多い．また，外出する機会がなければ積極的に外出しようとしないことも明らかだった．家庭児童相談室に来ることについては，名称から抵抗感があったという意見もあった．

本調査では，2003 年4月～2004 年3月および 2004 年4月から家庭児童相談室が開催する親子グループに参加している母親の中から同意の得られた6名に対して半構造化面接を行った．面接で得られた内容を逐語記録とし，分析の対象とした．分析は筆者と心理学を専攻する大学院生の3人でKJ法により分類し，カテゴリー化を行った．

母集団の総発語数は 278 であり，カテゴリーは 20，サブカテゴリーは 72 であった．カテゴリーの内訳は，発話数の多い順に【相談にのってもらう】【親同士の交流】【子どもへの思い】【サポートが欲しい】【知識が欲しい】【子どもの性格】【育児をする上での様々な思い】【相談室に来た経緯・動機】【育児環境が悪い】【先生のやり方が見本】【自分自身に関することを話す】【遅れが気になる】【気づかせてもらった】【前向きの気持ち】【客観視する機会】【病気のこと】【グループへのポジティブな思い】【親子のつながり】【母子のつながり】【変化がない】【その他】であった．

考察

家庭児童相談室に通ってくる子どもすべてに発達的な遅れがあるとは断定できないが，予備調査・本調査でインタビューした 11 人の来談経緯の内訳をみると，「1歳半検診後のフォローアップグループから」が6人，「3歳児健診で薦められて」が2人，後は「医療機関から薦められて」「きょうだいが来ていたから」がそれぞれ一人であることから，やはり関係機関や専門家がなんらかの援助が必要だと判断したことがわかる．

考察を，以下の3点について行った．①育児支援としてのグループは母親のニーズに対応しているか，②発達支援としてのグループに母親が望んでいるものはなにか，③グループが地域ネットワークとしての役割を果たすためにはなにが必要か．

①育児支援としてのグループは母親のニーズに対応しているかについては，抽出したカテゴリーの中から「相談」「知識」「サポート」がニーズに挙げられた．育児中の母親は相談に乗ってもらうこと，知識を得られること，サポートしてもらうことを望んでいる．グループという集団においては【気付かせてもらった】【客観視する機会】というカテゴリーにおいて説明できる．グループが育児支援として機能するためには，子どもの様子を見ながら相談員が気付いたことを伝える場，子ども同士や相談員と遊ぶ様子をみて，母親が学ぶこと，相談員がいることによって勇気付けられることが求められていることが示唆された．集団的対応においては，母親，子ども，相談員といった三者の相互作用があるため，客観的にみる機会があり，グループの重要性が明確であると考えられる．

研究成果の概要　つづき

②発達支援としてのグループに母親が望んでいるものは，育児支援としてのニーズに加えて，【先生のやり方が見本】【遅れが気になる】【相談室にきた経緯・動機】のカテゴリーによって説明できる．発達支援としての個別の対応としては，より専門的な知識，情報の提供が求められる．発達的な遅れや病気ことなどを率直に話せる場所であることも重要である．また，グループによる対応の特徴は，子どもと母親が過ごせる場所の提供と同時に母親がわが子以外の子どもの様子を見ることによって自分の子どもを客観視する機会を提供し，母親が子どもの成長や他の母親や子どもに目を向け気付きを得ることを促すことである．相談員からは，子どもの印象や成長などを具体的に示すことで，母親が気付かない子どもの様子を知ることができ，不安が減り，より子育てに前向きになることができる．相談員は専門家としてだけではなく，子育ての経験を持つ先輩としての存在も求められている．それは，母親であることと，多くの子どもを見てきた経験が母親にとっては相談する相手として重要だと考えるからである．相談員の視点ややり方を母親は参考としていることは理解しておく必要がある．多くの母親が望んでいることは，客観的に見てくれる視点とその視点からの専門家のアドバイスである．それに答えるためには，グループにおいて，子どもや母親の様子，母子のやりとりを観察すること，発達の様子などを時系列にそった変化を見逃さないことが重要であると示唆された．

③グループが地域ネットワークとしての役割を果たすために必要なことはなにかであるが，先行研究において，母親が安定した，開かれたネットワークを持つことは良好な子育てと関連していることが示されており，グループに参加することは，母親同士のネットワークを作ることであり，「セルフ・ヘルプ」といった意味でも有効であると示唆される．グループが地域のネットワークとして機能していれば，そこに参加する母親がフォーマルなサポートを受けられる可能性は高い．グループが地域のネットワークとして機能するためには次の二つの要因が必要になる．一つは，グループが育児支援としても発達支援としても母親が求める役割を担っていること．もう一つは，グループが育児支援ネットワークにつながっていることである．それらが可能であれば育児をする母親がグループに参加することによって，地域のネットワークとしての機能を果たすことが可能である．

家庭児童相談室は，個別的なかかわりとしての「相談員と母親」という一対一の援助機能とグループにおける集団的かかわりとしての援助機能を持っている．グループにおける集団的なかかわりとして，「母親」，「子ども」，「相談員」という三者の相互作用が重要である．それは，【気づかせてもらった】【客観視する機会】【先生のやり方が手本】というカテゴリーが抽出されたことから，グループが子どもだけのものではなく，母親，相談員も含めたかかわりにおいて機能しているという見方もできると考えらえる．子どもの様子を見ながら相談員が気付いたことを伝える場，子ども同士や相談員と遊ぶ様子をみて母親が気付きを得ること，相談員が母親にとって勇気付けになることがグループによって提供されている．発達支援としては，より専門的な知識，情報の提供と，母親が抵抗なく相談出来る場であること，適切な育児支援につなげることが求められることがわかった．また，情報交換や同じ悩みを持つ母親同士の交流としての場としての機能が求められることも示唆された．

しかしながら，相談室に対する情報の偏りや誤った見方から，来談することに対する抵抗もある．そこで，相談室の情報の周知に力を入れるとともに抵抗無く相談できる場づくりが求められる．また，グループが提供できることは受け手である母親のパーソナリティや育児の環境によって異なってくる．個別的なかかわりの中から得られた母親のニーズを集団的なかかわりとつなげていくことでより適切な援助が提供できると考えられた．

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。